

日本には古くから教育を重視する伝統があったといわれる。知識を求め、深めること、あるいは技能を身につけること、さらに徳育や体育を重視することにかけては、確かに日本は世界のどの国にも引けを取ることがなかったのではあるまいか。

例えば、薩摩藩では、「人をもつて城となす」という思想が根強く、とくに若者の教育には、「負けるな」「嘘をつくな」「弱い者をいじめな」という三つの原則が重んじられたとある。競い合うこと、公明正大さを求めること、そして弱い立場に置かれた人への配慮を忘れるなということである。この三原則を、競争、公正、福祉という現代的な言葉に置き換えれば、その意味するところが、「善き社会」の成立のために必要にして十分な条件を、みごとに要約していることがわかる。これら三つの精神規定をバランスを保ちながら大切にすることを説いた薩摩藩の教育方針は、きわめて現代的であったといえる。

近代日本の教育や人材の育成 (Human Resource Development) のシステムを考えると、留意すべきひとつの重要な点は、明治における制度上の大改革を、その連続性を考えずあまり過大視すべきではないということである。確かに明治維新は、政治体制の革命的変化であり、外国（とくに米国・イギリス・大陸ヨーロッパ）との接触の拡大、それに伴う文化的・社会的変化が劇的に起こった時期であった。しかしそのうちのいくつかは、従来の慣行が崩れたものの、実質的には「衣装は変化したが、本体はほとんど元のまま」といったものもあつた。おそらく教育という分野でも、本体が変化したものもあるが、衣装の変化が強調されたくらいがあつたといえる。

1 藩校・寺子屋から「学校」へ

藩士の教育・選抜システム

江戸時代の教育機関としてどのような種類のものがあつたのかを、まず簡単に見ておこう。江戸時代は身分制社会であつたから、武士と武士以外（農・工・商階級）の教育は原則的に分離して行われていた。藩校（あるいは藩学）は、諸藩が設置した藩士とその子弟

1 例えば、鹿児島商工会議所編（2003）には次のような記述がある。「島津忠良（日新公）や山田昌胤は、家臣やその子弟の心身の鍛錬を目的とした教育に力を注いだ。その結果、外城制度が完成すると、藩士を「二才（十代半ば―二十代半ば）」と稚児（六、七歳―十代半ば）に分け、集団で先輩が後輩を指導する郷中教育に発展した。「山坂達者」で心身を鍛え、示現流剣術を習得し、「四書五経」を学び、「日新公いろは歌」を暗記した。また、規律を尊ぶ教育は「負けるな、嘘をつくな、弱い者をいじめな」を是として、その精神は維新後の教育にも継承された。藩内には、庶民の学舎である寺子屋は殆んど存在しなかった」（六八頁）。

の教育機関であった。現代の高等学校でもこの藩校の名を継承しているものがいくつかある。福岡の修猷館、柳川の伝習館などはその代表的なものである。

藩校の設立はいくつかの理由があった。最も重要なのは、徳川の幕藩体制が成立し、統治者の正当性を獲得するための手段としての「教育と選抜のシステム」が必要とされるようになったことである。この点は、藩校が多く現れたのが幕藩体制が完成した十七世紀中葉であること、そして藩校がその姿を一応消すのが、一八七一年(明治四)の廃藩置県によって日本の中央集権制度が完成した時点であることも合致する(維新时期には日本全国で約二六〇の藩校があったと推定されている)。

藩校ではどんな「学科」が教えられていたのか。これも時代によって変化しているが、基本は文字・文章と人間的教養の教授を目的とした儒学(漢学)であった。例えば米沢藩の興讓館は、第九代藩主・上杉鷹山が再興した大規模な藩校であるが、一〇歳前後で入学した「素読生」は四書五経を中心に、一五歳から二五歳の「友于堂生」は通学生として歴史綱鑑補や史記の講読も学んでいた。寄宿生は、教科書として前漢書・後漢書・易知録などの講義をうけ、ときに詩文会で添削をうけ文章力を鍛えていたという。

しかし、幕末期、日本の軍事・外交に関する情勢が不透明になりはじめると、そうした政治状況に対応すべき実践的な知識も教育科目の中に組み込まれるようになった。医学、天文学、測量学、本草学などの洋学だけでなく、西洋の軍事学や練兵などをカリキュラム

の中に盛り込んだ藩も多かった。

藩校に入って勉強した藩士の子弟は、はじめは上士層が多かったが、次第に下士層、卒族にも広がり、後には上層庶民も入学するようになった(神戸藩・鳥原藩・足守藩など)。

この傾向は、農兵や民兵を募集する必要が生じた幕末期にさらに強まった。年齢も、初期

2 藩校の中で廃校となったものの、移設・新設されて名称を受け継いだだけのものなど、その「連続性」を判別するのは困難なケースが多い。しかし維新後生に残った藩校が、「小学校」や「旧制」中学校」として存続したものが多かったと見てよいだろう。

3 海原(1966)。

4 山形県立博物館(1968)。

5 以上の教科内容の年代的推移については、笠井(1960)の「教科設置年代一覧表」(二四六頁)に数量的に示されている(同じ表は石川(1972)一一五頁にも示されている)。興味深いのは、明治元年以降に設置されたケースでは、教科目として「漢学」がすべて取り入れられていることである。

6 これはもちろん「教育の機会均等」を意味するものではなく、均等化の傾向が見られたというにすぎない。海原(1966)にも次のような記述がある。「下級武士や陪臣の入学を許可する藩校が、一方で相変わらず座席や入寮生の定員割り当てで差別を温存、とくに庶民の入学に関して身元保証をやかましくい、講義も特定科目を指定し、あるいは武士身分と日時を分けてできるだけ庶民共学避けようとしたことなど、かくべつ珍しくない」としている(五一頁)。より詳しい実情は、笠井(1960)第九章「藩校に於ける庶民共学」で論じられている。

は元服を過ぎた一五歳あたりが入学年齢であったが、幕末期には七、九歳と若年化した点が注目される。言うまでもなく入学者は男子に限られた。

藩校の時代二〇〇年ほどの期間で、入学者は上級武士という一部特権階級から次第にその対象を拡大し、学科目も、儒学から洋学・実学へと重点を移して行く。ただし男女の教育の場における分離ははっきりしていた。

読み書き算盤

庶民の子どもたちの学習機関としての寺子屋も、町人層の文字・知識習得のための学校として重要な役目を担った。起源は藩校よりもはるかに古く、明治の公教育制度が確立した後も、しばらくはこの寺子屋が開設されたり、江戸期のものが残存した地方がある。このことから、寺子屋は日常的な実用性の求めに応じて生まれた学習機関であったことがわかる。

寺子屋で教えられたのは「読み書き算盤^{おまげ}」であった。科学と産業の普及にとって、この「読み書き算盤」が決定的に重要な役割を果たしたことは言うまでもない。公教育は単にコミュニケーションを容易にし、人びとの合理的計算能力を高めるという以上に、人間の考え方や感情を一定の型にはめるという役割を持っていた。独創的な考え方、非定型なものごとに対する判断能力は、結局、一定の型を約束^{よそ}ごととして習得しない限り生まれな

いことが多い。いかなる独創的な発明や発見も、ある水準の定型的な知識（これこそ「読み書き算盤」）を前提としており、全くの「白紙」からは生まれることはない。

また、行政上の命令や告示も、社会の規模が大きくなると口頭ではなく文書（御法度、御高札、御触書など）で行わなければならない。そして町人には、生活のための実用知識だけでなく計算能力自体（予測能力も含めて）がその職業上の成否を大きく左右することが多くなる。農民にとっても、「読み書き算盤」の能力に彼らの生活がかかっていた。年貢や村費に関して、領主や村役人の不正を見抜かなければならなかったからである。言い換えれば、領主側にとっては「読み書き算盤」による教育の普及は、必ずしも歓迎すべき現象ではなく、幕府・各藩とも、寺子屋を奨励することも公認するということもなかった。しかし、町人の経済力が強まり、また国防の重要性が増大するにつれ、庶民の教育もおのずと普及しはじめるとくに、天明・寛政期^{おんせい}、さらに天保期以降に寺子屋はたくさん開設され、最盛期には二万校を超えたと推定される。

寺子屋の先生は、村方三役あるいは下級武士のほか、僧侶^{そうりよ}、医師、神官、書家などの知識階級であった。経営者の身分を全国平均でみれば、「平民」が一番多く、次いで武士、

7 江戸時代の教育に関する優れた研究、ドーア（1970）の第七章、第八章、第九章は、平民の教育の実態が明確な視点から解説されている。